

石垣 絵美 提出 学位申請論文

『疱瘡習俗の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

人間に感染する天然痘ウイルスは、医学上は感染者の致死率が高い痘瘡・大豆瘡・天然痘 (*Variola major*) と致死率が低い乳痘・小痘瘡・牛痘 (*Variola minor*) の二つに分類されているが、民間の庶民生活においては、これらは明確に区別はされず、長く一括して「疱瘡」と呼ばれてきた。このウイルスは一九八〇年五月に国際連合世界保健機構 (WHO) によって根絶宣言がなされ、その罹病者がなくなって四十年ほどが経つが、疱瘡という病気を巡る習俗は現在も記憶に留められたり、実際に行われたりしている。罹病によって死に到ることが頻繁にあった疱瘡は恐ろしい病気と認識されてきたのであり、これへの対抗呪術や平癒祈願など、さまざまな民間習俗である民俗が形成され、これらのいくつかが現在も実修されている。石垣絵美の学位申請論文「疱瘡習俗の

研究」は、こうした疱瘡に関する民俗の全体像とそれぞれの実態の把握をめざし、罹患・平癒の過程で行われてきた習俗の特質の解明、江戸時代に流布された疱瘡絵の画題解釈、疱瘡神祭祀の現況などと、さらには中国山東省と天津市における疱瘡習俗について具体的に叙述し、分析を加えている。

本論文の構成は、「序章 研究の目的と先行研究」「第一章 疱瘡をめぐる理解と対処の歴史」「第二章 江戸時代の疱瘡への対処」「第三章 疱瘡絵をめぐる民俗伝承」「第四章 疱瘡習俗の諸相」「第五章 疱瘡神祭祀の諸相」「第六章 中国における天然痘習俗」「終章 結論と今後の課題」の八章からなる。

序章では研究の目的と、歴史学や文化人類学の研究も視野に入れながら民俗学における疱瘡習俗の研究史をまとめ、自らの研究視点から従来の研究の不足点などを指摘する。論文の本論は第一章から第六章までであり、それぞれの要旨を記すと、第一章では江戸時代を中心に疱瘡をめぐる理解と牛痘種痘法の普及の歴史をまとめる。病気としての疱瘡に関する知識の広まりは十八世紀初めからで、元禄十六年（一七〇三）の香月牛山『小兒必要養育草』には罹患時

の症状経過には五段階があることや平癒後の養生について記され、寛延三年（一七五〇）の橋本静話『疱瘡禁厭秘伝集』には疱瘡は胎毒に拠る、文化十二年（一八一五）の橋本伯寿『国字断毒論』には「天稟の毒気」に拠るが「生涯二度病ざる」などの理解があったことを示す。この章で論述の中心とするのは牛痘種痘法の普及についてで、緒方洪庵による除痘館での活動と安政四年（一八五七）の『病学通論』における「刺激物」によるという病因理解などを紹介し、明治時代以降の種痘の義務化への過程をまとめる。種痘義務化への過程においては、たとえば明治三年（一八七〇）三月の「種痘につき小諸藩種痘所論達」では、香月牛山が説いた症状経過と類似した五段階の症状が示されるが、病因については胎毒と気象因子によるという理解に留まっていることを明らかにする。さらに明治七年（一八七四）十月の文部省布達「種痘規則」などの法令類や明治八年（一八七五）一月の「信飛新聞」の種痘記事などから種痘の周知と理解のあり方をまとめ、大正時代末・昭和初期生まれの静岡県や群馬県などの方々から実際の種痘体験に関する聞き書きをあげ、種痘がどのように行われ、種痘後

には疱瘡神祭り、疱瘡神送りなどの呪的習俗が行われたことを示す。

第二章では江戸時代の医書や養生書などにみる疱瘡への理解と対処法を取り上げ、これらに記されている疱瘡に対する呪的対処などの習俗を検証する。十八世紀末から十九世紀初めには、疱瘡への罹病メカニズムが徐々に明らかになり種痘法の普及が開始されるが、これ以前の元禄十六年（一七〇三）の香月牛山『小児必要養育草』以降、寛政七年（一七九五）の渡充『荳瘡養育』や寛政十年（一七九八）の志水軒朱蘭『疱瘡心得草』、文化三年（一八〇六）の池田独美『國字痘疹戒草』などには疱瘡神祭祀や酒湯といった疱瘡平癒祈願ための呪的対処が引き続き見られ、江戸時代の疱瘡への対処には、科学的な対処と習俗である呪的な対処が併存していたと指摘する。さらに武蔵国柵田村（現八王子市東浅川町）の享保五年（一七二〇）以降の『石川日記』から疱瘡の流行と「湯かけ」などの習俗を示し、武蔵國中藤村（現武蔵村山市）の天保五年（一八三四）から明治四年（一八七一）までの指田撰津正藤詮『指田日記』から疱瘡流行・種痘実施と「湯流し・ささ湯」「疱瘡棚」「疱瘡見舞い」「疱瘡祝い」「疱瘡日待」、

平癒祈願の「千度参り・千垢離」習俗の存在を明らかにする。また天保十年（一八三九）から嘉永元年（一八四八）の渡邊平太夫政通『桑名日記』には、疱瘡の症状段階に合わせた門守り、疱瘡見舞い、疱瘡棚設置、笹湯などの習俗が存在することを指摘し、これらから香月牛山『小兒必用養育草』、橘南谿『痘瘡水鏡録』、池田霧溪『疱瘡食物考』などの江戸時代の医書等に記される疱瘡の発症時から平癒時までの罹病経過と治癒を願う諸習俗が密接に結びついていることを明らかにする。

第三章は江戸時代に流布した疱瘡絵を取り上げ、先行研究では分析が不十分であった画題の検討を行う。その結果、疱瘡絵に描かれる「富士山」は、疱瘡罹病の約十五日間のうち、生死の境を分ける九日から十一日目を無事に乗り切る「山あげ」を表すと判断できる。富士山はこの「山あげ」への祈願の意味をもつといえ、「疱瘡絵」の画題は疱瘡の症状についての江戸時代の医書などにおける知識が反映され、症状の推移と快復までの道筋を示すことで平癒が願われた。また「疱瘡絵」は多く赤絵であることは、習俗として行われた赤色の衣類

を着るなどと同様、すでに元禄十六年（一七〇三）の『小兒必用養育草』にある疱瘡平癒に赤色が有効であるという認識とも結びつき、ここには疱瘡の赤い発疹に通じる類似連想的な考え方が認められる。「疱瘡絵」に描かれる源為朝像は、文化四・五年（一八〇七・〇八）に刊行された滝沢馬琴『椿説弓張月』の記事が、病魔を除く発信源と考えられることなどの見解を示す。

第四章では伝承されている疱瘡習俗の具体的な内容をあげて分析を加える。疱瘡習俗には罹病時に行われる臨時的習俗と人生儀礼や歳時習俗として行われる定期的習俗があり、前者には罹病初期、罹病中、治癒時の三段階があることを明らかにする。罹病初期には疱瘡神をまつる疱瘡棚の設置、罹病中には疱瘡神祭祀、疱瘡の膿疱が盛り上がるヤマアゲには疱瘡団子、治癒時には疱瘡棚の廃棄や笹湯・酒湯・ユナガシが行われたと、習俗を詳細に整理する。これらからは江戸時代の医書などに記された疱瘡の罹病経過への理解が民間にもあり、疱瘡習俗は罹病から治癒までの罹病過程に沿って形成されていることを明らかにする。定期的習俗については、従来の疱瘡習俗研究では取り上げられていな

い「疱瘡踊り」「疱瘡オビシャ」を实地調査に基づいて現状を叙述し、分析を加える。前者は鹿児島県南さつま市での調査で、疱瘡神の祭祀や歌詞には疱瘡絵の詞書きとの一致などがあり、さらにこれは伊勢講とも連動していることを示す。後者の「疱瘡オビシャ」は千葉県成田市と市川市での調査記録で、成田市では「疱瘡囃子」も伴っているなど、疱瘡習俗の研究対象を広げている。

第五章では従来から多くの研究がある疱瘡神祭祀について、『新編武蔵風土記稿』と神社明細帳から疱瘡神社・疱瘡社について抽出し、村の鎮守社、村内社、集落の鎮守社に末社や合社として、あるいは寺院の境内社として祀られ、記載される建立年は十六世紀から十七世紀が多いことを明らかにする。その上で横浜市金沢区富岡東の長昌寺境内に祀られる芋観音堂の祭祀、小平市小川町の瘡守稻荷社の祭祀について現地調査にもとづいて現況を叙述し、疱瘡が根絶した現在においても疱瘡平癒祈願が持続していることを明らかにする。また、先の定期的習俗といえる家々が行う年初の疱瘡神祭祀については、八王子市上恩方町の現状調査を含め全国から事例を収集して、年初の疱瘡神祭祀の意味につい

て分析を加え、年初のアラガミ祭祀と解釈する。

第六章では中国における天然痘習俗について山東省と天津市での実地調査にもとづいて現況を叙述、分析する。山東省曲阜市陵城鎮では、春に種花花、旧曆四月に掉疙疤、旧曆五月三十日に掛紅子、旧曆六月初一に撒饅饅と頂紅子、焚紅子というように、春から夏にかけて日を定めての疱瘡習俗が、種痘を接種してからカサブタが剥がれて治癒するまでの対処として存在することを明らかにする。また、ここでは種痘接種時には母方の親族が、治癒時には父方の親族が実施者となっており、日本とは異なって疱瘡習俗に親族関係が重要な意味をもつことを析出する。このことから種痘が普及する以前においては、天然痘罹病前は母方の子どもであり、天然痘治癒を経て初めて父方の子どもになるという子どもの所属観が想定できるとする。さらにここでの天然痘の神は、家の中に迎え祭ってから十字路など家の外部に送り出し、帰りは同じ道を通らないという天然痘神の「祭送」が行われていることを指摘する。中国各地の天然痘神は、道教の廟などに小児の生育や病に関連する神と共に祀られており、天津市

津南区葛沽鎮で行われている葛沽宝輦花会は、その祭祀の一例である。これは旧暦一月十六日の祭りで、香斗茶棚会によって痘疹娘をめぐる祭祀が行われている。もともとは天然痘に罹患した際に天然痘の駆除や小児の加護と順調な成長を祈る祭りであるが、近年は長寿や平安を祈る対象へと変化していると指摘する。

終章は本論文の要点と今後の課題を提示する。疱瘡は根絶した病気であるが、流行病・感染症は次々に生まれ、疱瘡の諸習俗の研究は、医療と緩和ケアとの関係、病気への理解と対処を考えるとという現在の課題につながるのではないかと、今後の研究課題を示す。

論文審査の結果の要旨

民俗学における疱瘡習俗の研究は、一九〇〇年代前半に柳田國男が疱瘡踊、疱瘡祓い、疫病神送りなどについて触れているが、その研究は正月などに祀られる疱瘡神・厄神についての論考が多く、偏っていたといわざるを得ない。疱瘡罹病時に疱瘡棚を設けての疱瘡神祭祀、平癒時の疱瘡神送りなどの諸習俗はよく知られており、実地調査による記録も少なくはないが、これらは鎮送呪術や防御呪術の一環で理解され、習俗の全体を捉えての研究にはなっていないかったといえる。また、疱瘡絵の研究はH. O. ロータモンドなどの研究があるが、事例として取り上げられた数は必ずしも多くななく、疱瘡という病気の実態と関連づけての考察にはなっていないかったといえる。

日本の民間、庶民生活においては「疱瘡」という名で一括されてきた病気は、十八世紀後半に人痘法が、十九世紀初めに牛痘種痘法が導入され、以後、明治時代にはこれが義務化され、医療の発展とともに流行が減り、一九八〇年五月には国際連合世界保健機構（WHO）による根絶宣言がなされ、今や天然痘ウ

イルスによる病気はなくなった。しかし、種痘が広まりつつあった江戸時代末においても本論文中で『指田日記』を用いて明らかにするように疱瘡への罹病による死亡者は多く、死に至る病気としての恐怖感が高かったといえる。その恐怖感は明治時代以降も続くが、こうした病気であるからこそ、疱瘡をめぐってはさまざまな習俗が形成され、伝承されてきたといえる。

しかし、民俗学の疱瘡習俗の研究は前述のように十分ではなく、その全体像を明らかにすることをめざした石垣絵美の論文提出は歓迎すべきことである。後述するようにその論述は十分とはいえない点を含むが、本論文で評価できるのは次の三点に集約できる。

第一には、江戸時代の医書や養生書など三十三の文献記述から疱瘡という病気がどのように理解されていたのか、どのような治療法や養生法が示されているのか、さらには習俗といえる呪的な対処や神祭祀がどう記されているのかなどを抽出して分析し、一七〇〇年代には疱瘡の罹病過程には、いくつかの段階があると理解されていたことを明らかにしている。その上で、こうした罹病過

程理解と疱瘡習俗が密接な関係をもち、さらには江戸時代に流布した疱瘡絵の画題も罹病過程と関連することを指摘したことである。

具体的には、元禄十六年（一七〇三）の香月牛山『小児必用養育草』では、疱瘡には熱蒸、放標、起脹、貫膿、収靨の五段階、安永七年（一七七八）の橋南谿『疱瘡水鏡録』では、序熱、見点、出齋、起脹、行漿、灌膿、収靨、落痂の八段階を経て「痘ノコトハ終ル」の九段階で、本論文では橋南谿の示した九段階を用いて、序熱では赤幣束を刺した棧俵に疱瘡神を迎える、起脹、行漿段階には患者宅に疱瘡絵や疱瘡団子が贈られる、灌膿段階では疱瘡踊が行われる、九段階目の痘後には藁馬を村境に送ったり、患者に湯かけをして「かさぶた」を流したりするという習俗の対応である。疱瘡絵の画題では、富士山を描いているのは「山アゲ」などと呼ばれる起脹との対応である。

第二には、疱瘡習俗には種痘の場合も含めて罹病時に臨時に行う習俗と人生儀礼や歳時習俗など定期的な習俗とがあり、特に後者について、従来の研究で多く取り上げられてきた正月の疱瘡神祭祀に加え、鹿児島県の疱瘡踊、千葉県

の疱瘡オビシヤなどの実態を実地調査から叙述し、今後の研究課題も含めて提示したことである。この点については、『新編武蔵風土記稿』や神社明細帳から疱瘡神社・疱瘡社を抽出して祭祀傾向を明らかにするだけでなく、『耳囊』に記載されている「芋明神社」、現在の長昌寺の芋観音堂の疱瘡治癒祈願の祭祀を実地調査し、現状を明らかにしていることもあげられる。第一にあげた点も含め、これらの論述によって疱瘡習俗研究の枠組みを広げたということができる。

第三には、日本国内だけではなく中国山東省と天津市で疱瘡習俗の実地調査を行い、その具体相を明らかにしたことである。山東省での疱瘡習俗は種痘を行った時の「種花花」、瘡蓋が取れた際の「掉疙疤」、疱瘡平癒を知らせることと思われる「挂紅子」、さらに日本の疱瘡神に相当する「痘疹娘娘之神」「花母娘娘之神」をまつる「撒饅饅」が期日を定めて行われていることを明らかにした。天津市の葛沽宝輦花会は道教の「痘疹娘娘」の祭りであるが、中国での疱瘡習俗の調査研究では、疱瘡根絶後の変化・変容も視野に入れて把握している。

本論文において評価できる点は右の三点といえるが、たとえば第二章で扱っている江戸時代の医書・養生書による研究では、文献間の関係性にまでは分析が届いていない。赤色で印刷している場合が多い疱瘡絵については、同時に赤本についても研究対象にすべきであるが、やはりここまでは視野が届いていない。また、第四章で現在確認できる各地の疱瘡習俗を集成し、これには罹病初期、罹病中、平癒時の三段階があることを明らかにしているが、個々の習俗に対する分析が不十分でこれ以上の新たな知見の提示には至っていない。さらに本論文に加えた中国での疱瘡習俗の研究については、この研究全体のなかでどのように位置づけるのか、今後の見通しも必要である。

本論文には、さらに検討、分析が必要となるこうした課題が含まれているが、先にあげた三点について独自の実地調査も含めて疱瘡習俗の研究を進展させている。よって本論文の提出者石垣絵美は、博士（民俗学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和元年十二月四日

主查	國學院大學教授	小川直之	印
副查	國學院大學教授	大石泰夫	印
副查	國學院大學准教授	服部比呂美	印
副查	國學院大學大学院客員教授	新谷尚紀	印

石垣 絵美 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（民俗学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和元年十二月四日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	大石泰夫	印
副査	國學院大學准教授	服部比呂美	印
副査	國學院大學大学院客員教授	新谷尚紀	印